令和６年度　玉名支部の取り組み

記録者　前田三奈子（南関第二小学校）

１　研究テーマ

「英語教育における円滑な小中接続のための連携　～小学校での学びを中学校で生かすために～」

２　研究の実際

（１）　第１回教科等研修会（夏季研修会）：講師　栗原佳代指導主事（熊本県教育センター）

＜講話の内容＞

・小中連携のゴールは「小学校でもしてきた内容を、さすが中学校と思えるように活動を発展させること」

・同じ所と相違点について、情報交換・交流・小中連携したカリキュラム作成・指導法の継続。

・小学校では聞くこと・話すことが中心となるが、読むこと・書くことの指導目的のあり方を考える必要がある。中学校では聞く・話す・読む・書くの４技能の定着が目標となり、言語活動の高度化・語彙の大幅増加が課題となる。

・言語活動では「相手意識」や「目的意識」を持たせることが大切。目的、場面、状況を提示し、使用する言語材料を明示しない。

＜小学校の協議で出た意見＞

・単元づくりの中で１時間目を大切にしている。デモンストレーションを見せることで、めざすゴール・めあてを確認する。それがめざす児童の姿につながる。

・観点を示した上で、単元の最後にパフォーマンステストをしている。知識・技能は評価できるが、主体的に学ぶ態度の評価は難しい。指導者の主観が強くなると思われる。

・５年生の「将来の夢」の発表を６年生に見てもらったり、６年生の「行きたい国」の発表を５年生に見てもらい行きたいと思った国を投票したりしている。

・言語活動に取り組むための調べる時間をどこに設定するかを悩んでいる。

（２）　第２回教科等研修会

１０月２２日（火） 授業者　：米田　尚子先生（玉名市立高道小学校） 単　元　：６年生　NEW　HORIZON　UNT6「Save the animals」 指導助言：栗原　佳代指導主事（熊本県教育センター）

＜授業の概要＞

・玉名市岱明町という土地柄を生かして、「有明海でクラス生き物を救うために私たちにできることをＡＬＴに伝えよう」という単元のゴールを掲げて授業に取り組まれていた。

・中学校への接続を考えて、読む活動を意識的に取り入れていた。ペアでカードを読む活動とピクチャーディクショナリーの絵をかくして文字を読む活動があった。

・中学校での書く活動につなげるために、まず英語で発音する練習を十分に確保した後、言えるようになった文を書くというように、段階的に活動をつなげていた。

＜自評＞

・PD の活用では、絵をかくして、文字を読む活動を取り入れた。全体でカードを見て練習をした後に取り組むことで、徐々に文字を読めるようになってきた。

・書く活動では、大文字で始めること、一語ずつ間を空けること、ピリオド、を意識させている。

・読む活動を取り入れてから、発表が上手くなってきた。

＜全体で共有したこと＞

・ペアでカードを読むタイムトライアルの活動はとても良かった。

・小５の外国語の学習内容は「自分のこと」、小６からは「身の回りのこと」となる。本単元の環境問題の提示は４ＲやＳＤＧｓを予備知識としておさえる必要がある。いろいろな教科・知識と絡めていくといい。

・小学校を卒業するまでにアルファベットを４線にそって書くこと、名前をローマ字で書くことを徹底させる。

・中学１年生のＵ１～U5までは小学校の内容。

・小４の国語でローマ字を習うので、その時にヘボン式に触れる。

・中一の単語量がとても多いが、小学校では夏休みの宿題ぐらいでしか練習する時間はとれない。

＜指導主事よりまとめ＞

・小中の目標の違いをお互いに理解する。

・「有明海の生き物」が本時のテーマだったが、目的・場面設定がとても大事。

・子どもたちの伝えたい気持ちを大切にする。

・小学校は「聞く・話す」が中心で、「読む・書く」は活動的に少ない。中学校では「書く活動」が求められる。それに備えて、小学校では大文字・小文字の習得と語順に慣れることが必要。

（３） 令和８年度県大会組織づくり：第２回教科等研修会の後

３　成果と課題（〇成果　▲課題）

〇夏季研修の講話の講師と研究授業の指導・助言者を同じ指導主事にお願いしたので、講話で話したポイントを授業に取り入れてあり、授業づくりの視点が明確で分かりやすかった。

〇夏季研修や授業研究会で小学校と中学校の違いについて、中学校区ごとに話す中で知り合うことができた。

〇事後研究会では、中学校と小学校両方で継続して取り組む必要がある、フォニックスや文字に慣れ親しむ方法などのアイデアを共有するいい機会となった。

▲小中学校の外国語科の授業づくりについてさらに連携していくために、今後も各校区内でも密に連絡をとり、お互いに歩みより取り組んでいく必要がある。その意識を高めるためにも、夏季研修の内容を来年度はさらに工夫して取り組んでいきたい。

▲令和８年度は県大会を控え、研究組織編成もできたので、令和７年度も共通実践できるように研究の方向性について全会員で協議していきたい。